

氏名	石原 勇太郎
ヨミガナ	イシハラ ユウタロウ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博第 22 号
学位授与年月日	2025 年 3 月 15 日
学位論文題目	アントン・ブルックナーの交響曲研究 ——層的な視点による調構造の分析——
博士論文審査委員会	（主査） 教授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 教授 原田 敬子 （作曲） （副査） 教授 武石 みどり （音楽学） （副査） 准教授 山洞 智 （ピアノ、ピアノ伴奏） （副査） 池上 健一郎 （音楽学） （京都市立芸術大学教授）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日	時	2025 年 2 月 14 日（金）18 時 00 分～20 時 30 分
場	所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス C 405
判	定	合
審査結果の要旨	<p>本論文は、先行研究への批判を踏まえ、ブルックナー研究における 3 つの課題を明確に設定し、それに対する意欲的な応答を試みたものである。3 つの課題とは、(1) 交響曲がモノトナリティーの概念のみに基づいて分析されていること、(2) 交響曲全体の調的分析が十分に行われていないこと、(3) 異なる交響曲や異稿を越えた分析が不足していることである。本論文は、これらの課題を克服すべく、調の分析に層的な視点を導入し、モノトナリティー概念を相対化しながら、ブルックナーの交響曲における調的構造の発展的な変化を、すべての異稿を考慮に入れつつ統一的に記述しようと試みている。この点において、本論文はブルックナー研究の新たな展開を示すと同時に、ブルックナーを含めた後期調性様式の再考を促す理論構築の試みとなっている。</p>	
	<p>音楽理論一般が音楽的事象の解釈である以上、本論文が提示するものとは別の解釈が常に存在しうることが確かである。審査員による質疑の対象となったのも、主に著者の解釈手法に関するものであった。特に「層化」を行う際に、特定の調を特定の層へとグルーピングする手続きについては、異名同音の関係や半音階的な近接関係をどのように位置付けるかといった点に関し、今後さらなる理論的洗練が求められることが指摘された。しかし、構造単位として設定される「Metrik」の調的可能性に幅をもたせるとともに、デュナーミクやオーケストレーションといった要素を考慮し、実際の音楽に即した柔軟な分析を実施しようとする姿勢は、本論文の分析を真摯なものにしている。また、審査会当日における本人の応答も、本論文における理論的な解釈の根拠をより深いレベルで明らかにするものであった。</p>	
	<p>総じて、ブルックナーの全交響曲を対象にした大規模な研究に取り組み、従来にない独自の方法論を用いて新たな解釈の可能性を提示した点は高く評価される。これらの成果を踏まえ、審査委員会は本論文を合格と判定した。</p>	

以上